

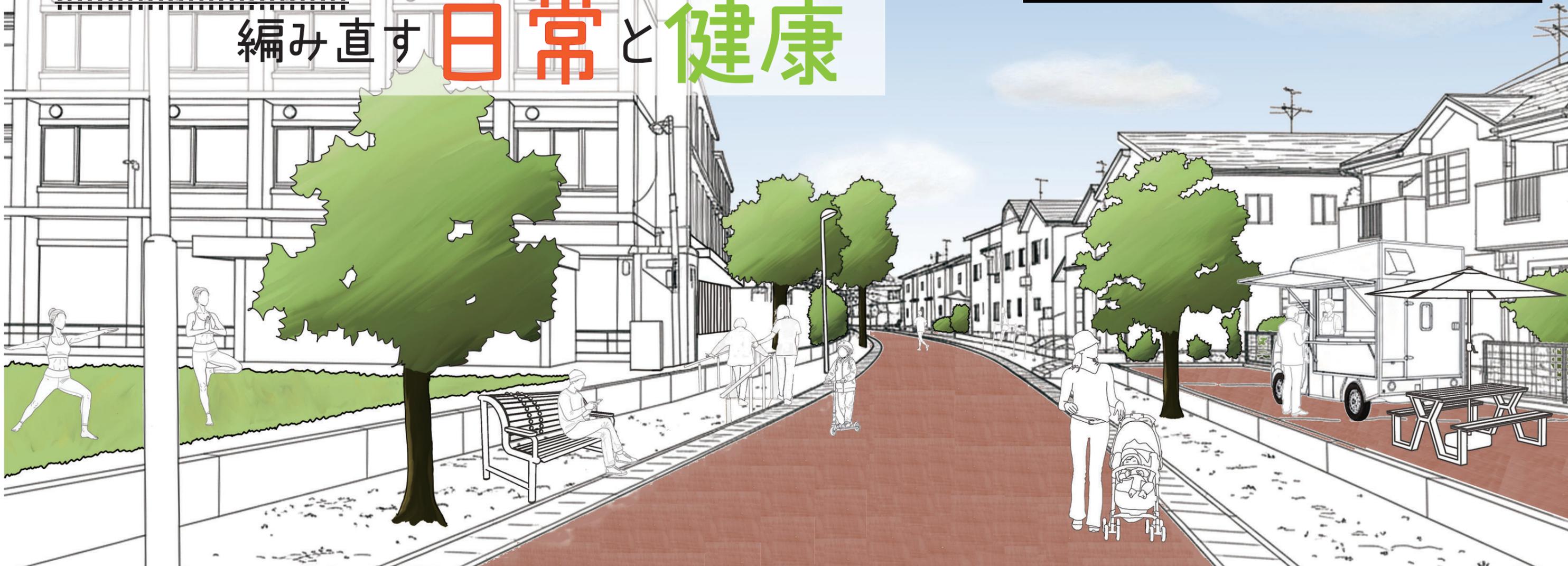
廃線路で

編み直す 日常と健康

本提案の対象地であるときめき周辺地区は、新潟市郊外に位置する新旧住宅地が混在したエリアである。かつての新潟電鉄があった廃線跡地は歩行空間として整備されているものの、周辺の公園や公共施設とのつながりが弱く、日常的に人が集まる空間とはなっていない。

また、車中心の生活様式や雪・雨の多い気候条件が、住民の外出や交流の機会を減少させ、地域コミュニティの希薄化や健康面での課題を生じさせている。

本提案では、廃線跡を軸として周辺の公共ストックを有機的に結び、歩行と滞在を促す環境を再構築することで、誰もが気軽に体を動かし、地域の中で関わり合うきっかけを生み出す。スポーツや散歩などの軽い活動を通じて、健康増進と交流の再生を両立させる、郊外型の新しいまちのあり方を目指す。



01 現状

対象地：新潟県新潟市西区 ときめき・山田の一部 / 対象地人口：約 7000 人

- 対象地の空間特性
- 対象地は、アパートや一軒家などの住宅が大部分を占め、ニュータウンと古い住宅地が混在する地域である。
 - 対象地内には小さな公園が点在し、病院・老人ホームなどの福祉施設や小学校も立地している。
 - かつて新潟電鉄の路線であった場所は、現在アスファルト舗装された歩行空間として活用されている。



- 地域特性
- アパートに住む子育て初期世代（乳幼児）や、新築の一軒家に住む子育て中期世代（小学生～高校生）、昔からある住宅地に住む高齢者世代など、多様な世代が暮らす住宅地である。

歴史的背景

- 1920年～1960年 信濃川下流で氾濫対策として大河津分水が通水し、河川水位が低下 運航困難となった河川蒸気の代替手段として、1933年に新潟電鉄が開通
- 1960年～2000年 1963年の新潟地震の被害やモータリゼーションの急速な進行により、電鉄利用者が激減 1990年頃に、郊外のスプロール化の中でときめき周辺の開発が進む 1999年に新潟電鉄が廃止に至り、レールなどが撤去され、電鉄跡地が残る
- 2000年～現在 ときめき周辺では、ゆるやかな人口減少・高齢化が進む 2007年～2021年に廃線路が歩行空間として舗装整備される



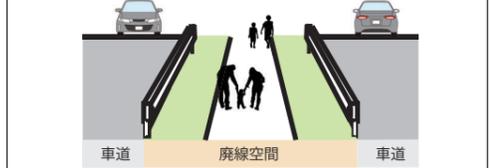
02 課題

■活用レベルの低い既存ストック

既存ストックは点在しているものの、連続性や回遊性に乏しく、周辺住民のみの利用に限定され、持続的な活用がされていない。世代間の断絶や交流不足により地域のつながりが弱まっている。



対象地中央にある廃線跡の歩行空間も、アスファルト舗装やベンチの設置程度の整備に留まっており、電鉄時代から残るガードレールがアクセスを阻むため、人が集まる空間とは言い難い。



■車社会と地域コミュニティ

新潟の交通特性として、日常移動の多くを車に依存した車社会であることがあげられる。車道優先の道路構成や狭い歩道が歩行を妨げ、歩行ネットワークが断絶され、歩きにくい状況になっている。



玄関から車までの移動で生活動線が完結してしまい、近隣住民と顔を合わせる機会が減少している。その結果、地域内での交流や繋がりが希薄になっている。



■新潟の地域特性と健康状態

雪や雨が多い新潟では外出機会が限られ、屋外での運動・健康が失われている。その結果、季節性うつや生活習慣病の恐れが高まっている。



新潟の悪天候により、外出機会が限られることは地域住民との交流が限定されることに直結し、地域コミュニティの希薄化を招く。



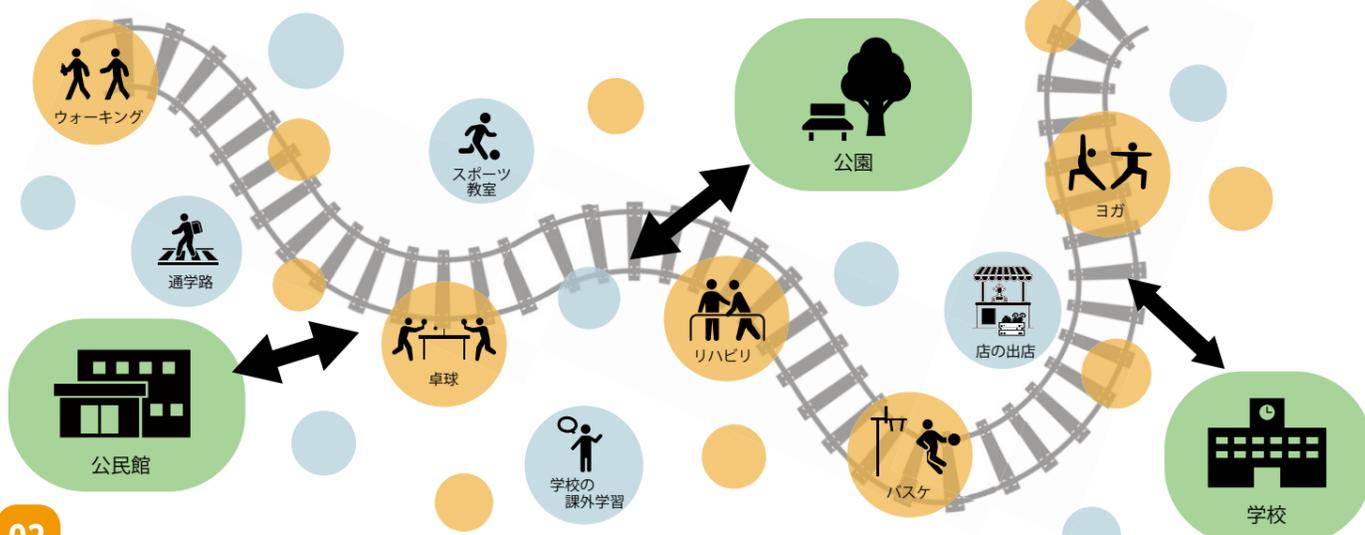
03 コンセプト

「まちの資源を廃線につなぐ」

失われた鉄路が、再びまちを動かす。かつて場と場、人と人を結んだ廃線跡を、今度は「歩く」「集う」「楽しむ」を結ぶ軸として再生する計画である。線路跡を中心に、公園や公民館、学校などのまちの資源を結び付け、誰もが自然と体を動かしたくなる環境をつくる。失われた線路を「ときめきロード」として再び描き、散歩やジョギングといった動作が日常的に「はぐくまれる」場になる。住民の日常動線として「誰もがアクセスできる」場としてまちにひらかれ、様々な世代が出会い「つながれる」。地域に新たな活力を灯す「出会いの場」になる！

01 「つくる/はぐくむ」
 インフラの変化により、使われない廃線を人が体を動かす、あつまるための場所として捉え活用する

- ・日常的なスポーツの場の創出
- ・廃線を利用した学びの場



02 「あつまり、ともに、つながる」
 こども・子育て世代・高齢者、、、様々な世代の交流の場に

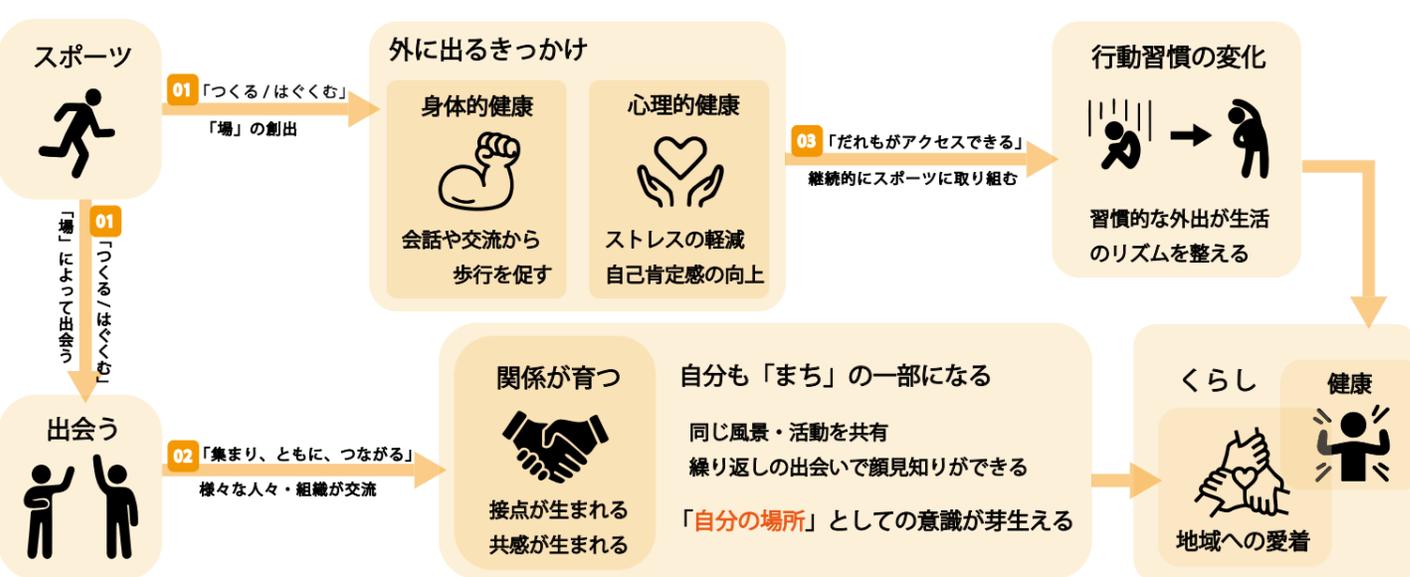
- ・日常的な出会いの場
- ・それぞれの生活が表出
- ・まちの住民の意識・アイデンティティ

03 「誰もがアクセスできる」
 スポーツによってまちがひらかれる

- ・日常の動線になる
- ・誰もが関われる余白空間、共在の場

05 スポーツとくらしの接続

くらしの中で無理なくできるライトなスポーツには、散歩やストレッチなどが挙げられる。外に出る小さなきっかけが、体を動かすきっかけを生み、心身の健康を育てていく。さらに、まちに出て人と出会い、関わることでまちの中に小さなつながりが生まれる。そんな日常の積み重ねが、地域の暖かさやその土地らしさを形づくり、まちのアイデンティティを育てていく。



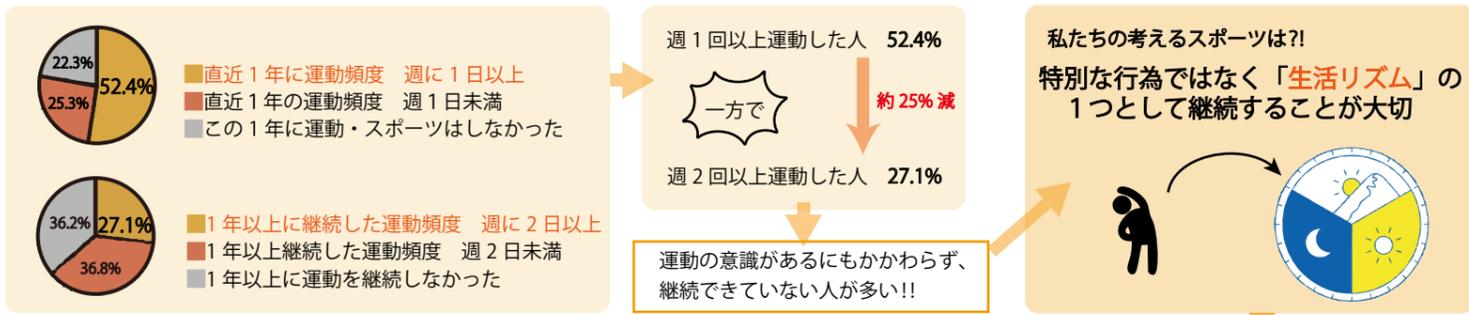
04 スポーツと健康

○生活上の精神的健康

スポーツは特別なものではなく、日々のくらしの中に自然に取り入れることが、心身の健康を支える鍵となる。気軽に継続できるライトなスポーツを通して、地域の Well-being を育む。



○くらしの中ににじむスポーツ



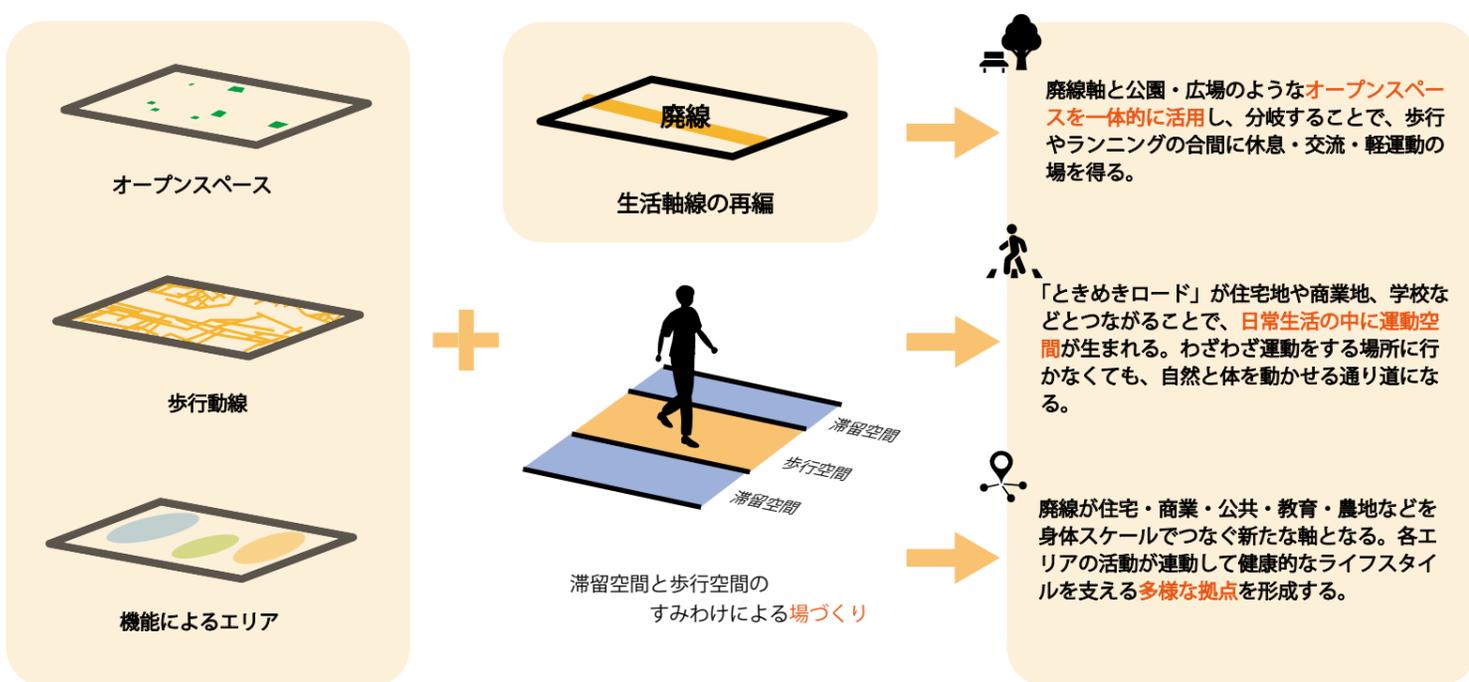
ライトなスポーツの導入

ライトなスポーツとは?
 年齢や体力に関係なく、誰でも気軽に楽しめる軽運動。健康づくりや地域の交流を目的としている。

ライトなスポーツの特徴

- ①低負荷で気軽にできる
- ②継続しやすい
- ③どこでもできる

06 廃線とのつながり



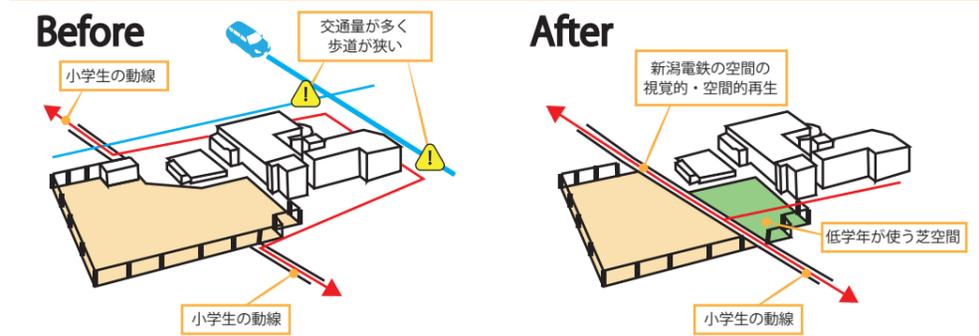
07 デザイン手法

ケース1 小学校を繋げた廃線利用

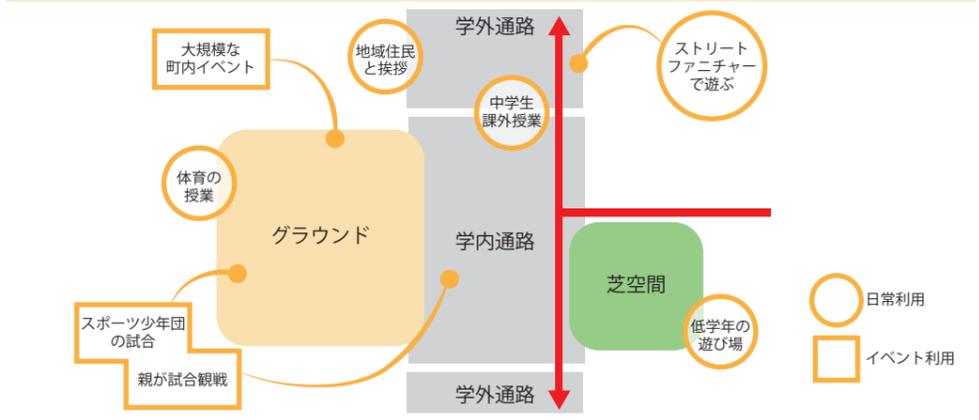
■背景と課題
山田小学校は、かつて校舎とグラウンドの間にあった廃線跡を統合することで敷地を拡張した。しかし都市的には、直線的なランニングコースや移動空間としての廃線空間の軸が断絶され、**地域動線としての連続性**や**新潟電鉄の痕跡**が失われている。



■方針
本計画では、廃線の軸線を地域と小学校を地域に延長した交流の場として再構成し、かつて地域を貫いた鉄道の線形を**視覚的・空間的に再生**することを目指す。安全面では、交通量の多い校門側を避け、廃線側から敷地内へ入れる**第2の安全動線**を設け、登下校や校外活動の際に児童が安心して移動できる構成とした。



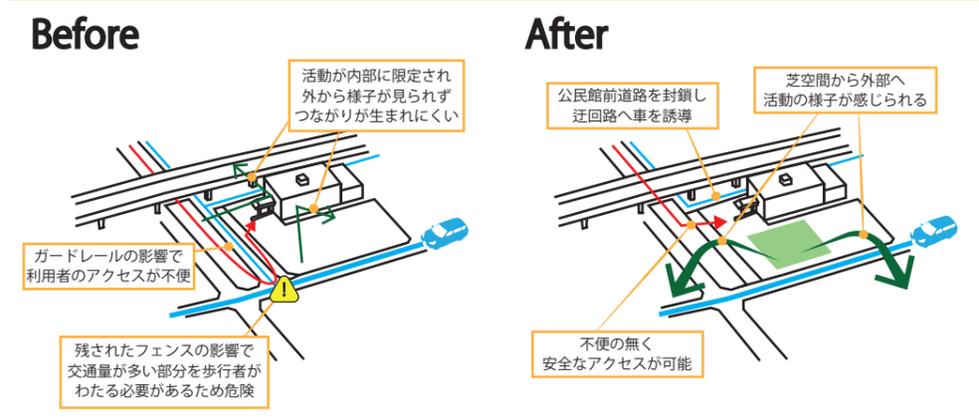
■空間デザイン
分断されたグラウンドには東側に**芝生空間**を設置し、西側のグラウンドとゾーン分けすることで、低学年児童が**自由に、かつ安全に遊べる場**を配置した。地域住民にとっては、かつて鉄道が通った軸が子どもたちの活動の場としてよみがえり、**地域の記憶や想い**を静かに継承していく。



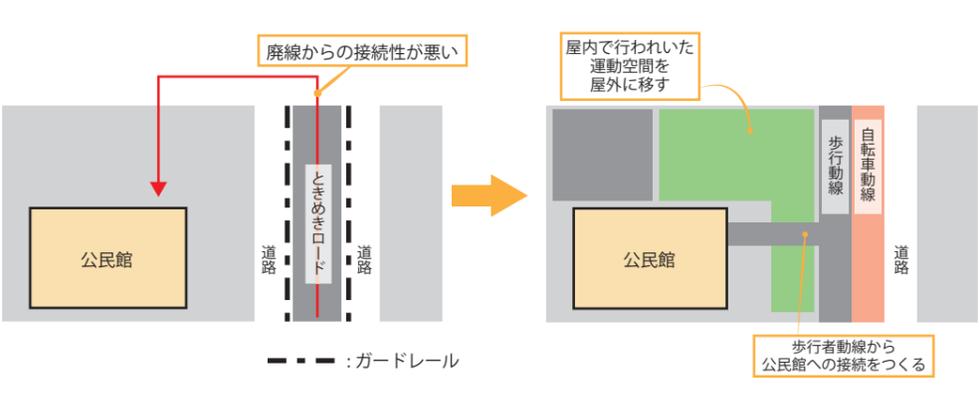
ケース2 地域に開く公民館

■背景と課題
黒崎北部公民館は、屋外活動の場がほとんどなく、活動が建物内部に限定されているため、**外部から活動の様子が見えず**、地域とのつながりが生まれにくい。また、ときめきロードに隣接した立地であるにもかかわらず、**連続して残るガードレール**が敷地へのアクセスを妨げている。

■方針
本計画では、公民館をより開かれた地域の交流拠点にするため、**屋外活動の機会**を創出できる場をデザインする。駐車場の半分を周辺の空地に移転し、公民館と接続した**芝生空間を整備**することで屋外活動を可能にする。また、ときめきロードからのアクセス向上のため、正面道路を閉鎖し**ガードレールを撤去**して接続性を高める。

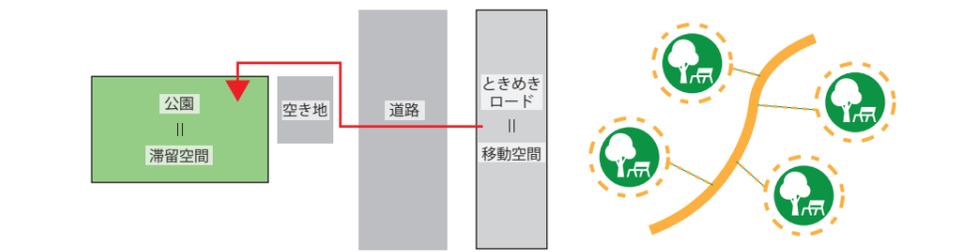


■空間デザイン
整備された広場は、親子や高齢者の軽運動など、多世代が自然に集まれる交流空間となる。芝生空間では活動の様子が外部から視認でき、自然と地域住民が関心を寄せ、**参加しやすい雰囲気**が生まれる。これにより、公民館は内部に限定されず、**地域と連動**する多世代共用の屋外活動拠点として有効活用される。

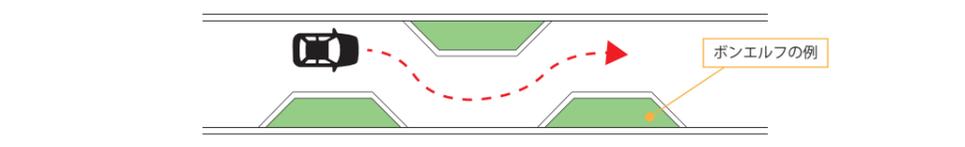


ケース3 公共空間と廃線の接続

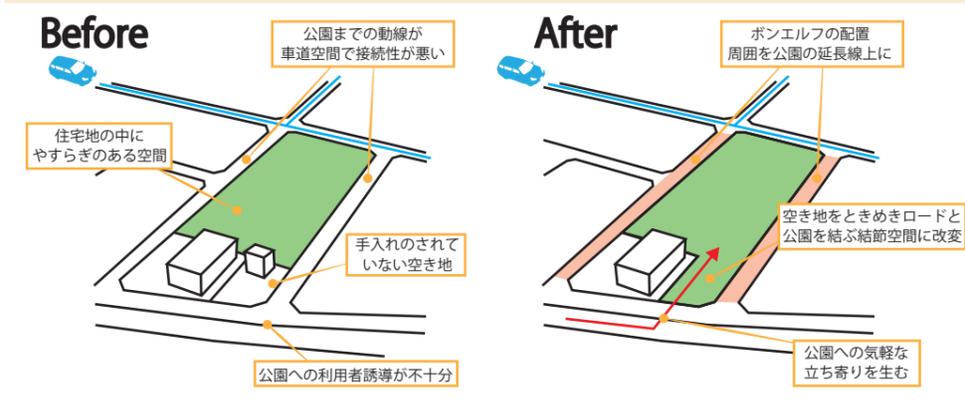
■背景と課題
ときめきロードはランニングや散歩の場として利用されているものの、付近に点在する公園との動線が分断されているため、**立ち寄って滞在できる空間が不足**している。ときめきさくら公園は、地域の主要な公園であり、ときめきロード付近に位置している。しかし、**道路空間のみの接続**や**視覚的なつながりが弱い**ことから、公園とときめきロードの利用がつながらず、公園を巻き込んだ回遊や交流が限定的となっている。



■方針
本計画では、ときめきロードと公園の間にある**道路と空き地を結節空間**として再構成し、公園と周辺空間の一体的な利用を促す。道路にはボンエルフの考え方を取り入れ、車の速度を抑えながら、歩行者や子どもが安全に通行・滞在できる環境を整える。これにより、公園が地域の動線の中で**自然に立ち寄れる空間**となることを目指す。

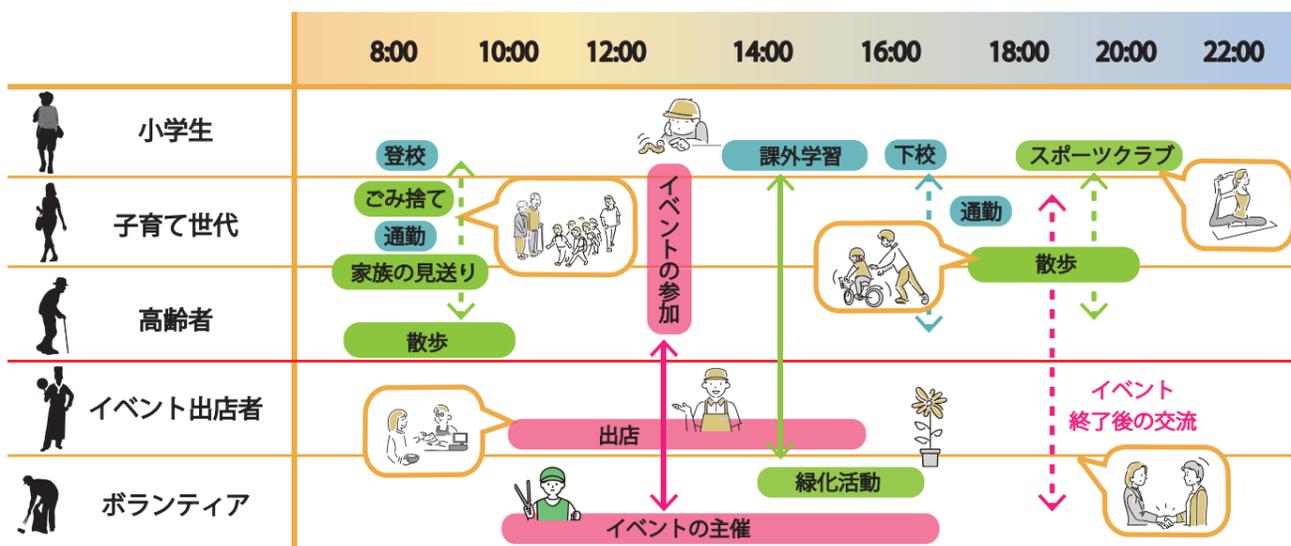


■空間デザイン
道路と空き地を緩やかにつなぎ、ボンエルフによって安全で滞在しやすい生活道路空間を形成する。ときめきロードからの動線上にはベンチや緑の広がりを受け、散歩やランニングの途中にひと休みできる、縁側のような滞留の場を配置。これにより、公園とときめきロードが連続し、**日常的な回遊と滞留を生む公共空間**へと再生する。



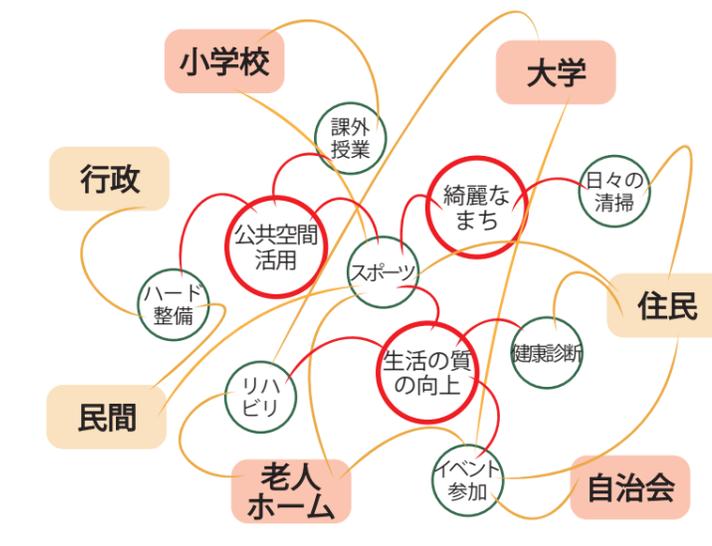
08 住民の日常

学校・職場・家など、各世代によって生活の場所・リズムは違う。そんな中でも、各世代が交流するタイミング・きっかけはたくさんある。それぞれの生活の中でも、**地域住民が交流して関わり合っていく**。



09 将来ビジョン

今後、廃線空間を軸とした公共資源を持続的かつ有効的に活用するためには、**他主体との連携が重要**である。



10 都市的立ち位置

■都市構造上の位置づけ
対象地は新潟市郊外に位置し、都市中心部との距離を保っている。また、幹線道路と新潟バイパスの交差する位置にあり、**都市的な交通結節点**として位置している。

■市街地の集約と廃線跡の可能性
人口減少社会の現代において、ときめきのような地方都市の郊外に位置する市街地では、コンパクトシティの理念に基づく、**拡散した住宅地を維持するのではなく、ときめきロードを基軸とした居住地の再集約**が望ましい。
歩行動線や公共空間としての再利用を通じて、自動車依存の郊外生活に対し、ときめきロードの活用は新たな選択肢をもたらす。

■今後の方向性
交通の縦横軸を基盤にした車社会の利便性を活かしつつ、住宅地では歩行動線の維持・強化を図ることで、車による利便性を確保しつつ、歩行者が安全・快適に回遊できる空間構成を備えた、郊外型のコンパクトエリアの形成を目指す。

